第９課　あるべき姿になるために

【暗唱聖句】

「だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」第二ペテロ1:5～7

このみ言葉は力を尽くして神様を信じる信仰を持つことから始まって、最後は愛の人となるに至ります。言葉を変えると、信仰が私たちを神様のようなものへと作り変えていくということです。最初に「だから・・・」という言葉で始まっていますが、これは1つ前の聖句を指しています。そこには次のように書かれてあります。「あなたがたがこれらによって、情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためです」この世の退廃から免れ、神様の本性を身に着けていくために、力を尽くして信仰を育て、そこに徳、知識、自制、忍耐、信心、兄弟愛、そして愛を加えていくことで、やがて神様の本性に預からせていただけるように成長することができるということです。

【今週のテーマ】

今週は自分をイエス様に捧げることによって、神様の力がいかに働き、どのようなものへと作り変えられていくのかを学びます。

【日曜日　尊い信仰】

「イエス・キリストの僕であり、使徒であるシメオン・ペトロから、わたしたちの神と救い主イエス・キリストの義によって、わたしたちと同じ尊い信仰を受けた人たちへ」第二ペテロ1:1

ペテロはこの手紙の送り主に対して、「同じ尊い信仰を受けた人たち」と表現しています。同じ尊い信仰とは、同じ価値の信仰あるいは同じ特権がある信仰という意味があります。そして、この同じ信仰を受けたと受動的な表現を使っています。信仰とは自分で獲得したものではなく、神様の恵みによって導かれ、与えられたものなのです。その思いがあるとき、すべてが神様への感謝になって現れることでしょう。

「主イエスは、御自分の持つ神の力によって、命と信心とにかかわるすべてのものを、わたしたちに与えてくださいました。それは、わたしたちを御自身の栄光と力ある業とで召し出してくださった方を認識させることによるのです」第二ペテロ1:3

わたしたちの「命と信心」に関わるすべてのものは、主イエスが持っている神の力によって与えられるものだと書かれてあります。ここでイエス様は神様であるということが明確に述べられており、その神様としての力が、わたしたちに今もなお命と信仰の力を与えて続けてくれていることがわかります。また、激しい迫害による命の危険が迫る状況の中にあって、ペテロはイエス様が命を与えて下さるから心配する必要はないと、そしてそれを信じる力もイエス様が与えてくださるのだと励ましています。そして、この命と信心にかかわるすべてのものを与えられるのは、わたしたちがイエス様を知っているからなのだと言います。イエス様を知るとは単に知識ではなく、イエス様との愛の関係を築くことを通してお互いに知っているということです。わたしたちはイエス様を知れば知るほど、ますます命と信仰が増し加わっていきます。さらに驚くべき神様の業は続きます。

「この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています。それは、あなたがたがこれらによって、情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためです」第二ペテロ1:4

神様の栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束、すなわち永遠の命と信仰に関わるすべてのものが与えられています。それは情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためだと言います。つまり、神様からの素晴らしい贈り物を知るとき、この世の情欲に染まり退廃した世界にもはや何の興味もなくなり、神様のように生きることを望むようになるということです。

【月曜日　愛―クリスチャンの徳の目標】

「だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」第二ペテロ1：5～7

永遠の命と言う素晴らしい約束をいただいているわたしたちは、この退廃した世界から離れ、神様のような愛の品性を持つようにと導かれています。そこで「だから…」と5節以降続きます。ペテロが語る最初の一歩は、「信仰」でした。わたしたちを罪が救い、永遠の命を与えて下さるイエス様への信仰がすべての土台となります。

この信仰という土台の上に「徳」を加えるようにと続きます。信仰だけでは足りないということです。信仰は神様とわたしとの一対一の関係ですが、他者との関係を深めていくことなしに、神様の本性に預かることはできません。徳というギリシャ語アレーテーは、男らしい、勇気、奉仕、貢献という意味がある言葉で、エリートの語源となっています。つまり徳とは、自分を犠牲にして、男らしく勇気をもち、奉仕していくことを言います。

しかし、徳だけでもまだ足りません。そこに知識を加える必要があります。独善的な奉仕は押しつけとなり、逆効果になることも少なくありません。だから正しい判断力を与えられるように知識が必要です。また、その知識とはイエス様に基づく正しい知識です。イエス様に対する正しい知識が欠落していれば、正しい聖書的な行動や判断ができません。

「知識」に加えるべきことは、「自制と忍耐」です。時に正しいとわかっていても、良い時を待たなければならないことがあり、自制と忍耐を強いられることも多いです。気落ちばかり焦ってもうまくいきません。

「信心」とは、神様への礼拝を捧げる敬虔さを表します。そして同じ礼拝を捧げる兄弟姉妹への「愛」、さらにその上にすべての人への「愛」と続き、頂点に達します。

【火曜日　あるべき姿になりなさい】

「これらのものが備わり、ますます豊かになるならば、あなたがたは怠惰で実を結ばない者とはならず、わたしたちの主イエス・キリストを知るようになるでしょう」第二ペテロ1：8

信仰、徳、知識、自制、忍耐、信心、兄弟愛、愛、これらがしっかり備わり、ますます豊かに成長していくならば、怠惰で実を結ばないクリスチャンとはならず、もっとイエス様を知るものとなることでしょう。ところはすべてのクリスチャンがそのように歩んでいるわけではありません。

「これらを備えていない者は、視力を失っています。近くのものしか見えず、以前の罪が清められたことを忘れています」第二ペテロ1：9

これらものをしっかり備えることを怠り、豊かに成長できず、実を結ばない者もいます。彼らは目が見えなくなっているとペテロは言います。目の前のことしか見えないのです。そして、自分たちが罪を清めていただいたことをすっかり忘れて生活しています。

「だから兄弟たち、召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いっそう努めなさい。これらのことを実践すれば、決して罪に陥りません」第二ペテロ1：10

努力という言葉はキリストの教えと無縁であるかのように教えられることがありますが、決してそうではありません。自分の力で罪を克服することができなくても、神様が望まれる生き方へと努力することはできます。そのとき必ず成長もあるのです。もちろん、努力を努力と感じないほど自然に神様との深い関係を築いていけるとするなら、それはさらに良いことでしょう。パウロも次のように言っています。

「このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」ローマ6：11

クリスチャンの生き方は罪に目を向け、頑張って罪を犯さないようになるのではありません。それは罪に対してはすでに死んでおり、そこから解放されているからです。しかし、キリストに結ばれてキリストと共に生きています。だから、わたしたちはキリストを見上げて、キリストと共に生きるように努力するのです。すると、神様の御品性へと、あるべき本当の姿へと成長することができるのです。この点をわたしたちは常に考える必要があります。

【水曜日　仮の宿を脱ぎ捨てる】

「わたしは、自分がこの体を仮の宿としている間、あなたがたにこれらのことを思い出させて、奮起させるべきだと考えています。わたしたちの主イエス・キリストが示してくださったように、自分がこの仮の宿を間もなく離れなければならないことを、わたしはよく承知しているからです」第二ペテロ1:13、14

ペテロが語っている事柄は、この体を仮の宿としている間のこととして語っています。つまり、今生きている間、どのように生きるべきなのかを語っていると言います。というのは、やがてこの仮の宿を離れるときが来るからです。このようなペテロの表現から、人は死んだらすぐにこの肉体という仮の宿を離れて、永遠の御国あるいは地獄に行くのだと勘違いしている人が多いようです。霊が肉体から独立して存在しうるという考えです、このような思想を霊魂不滅と言います。しかし、聖書は一度死んだあと眠った状態となり、その後主の再臨のときに救われる者たちは復活することを教えています。そのためにイエス・キリストも一度死なれて復活されたのです。

「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです」第一コリント15:13

「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」第一コリント15:52

【木曜日　死に臨んでの信仰】

ペテロがこの第二の手紙を書いているとき、死が目前まで迫ってきていることを自覚していました。「自分がこの仮の宿を間もなく離れなければならないことを、わたしはよく承知しているからです」（第二ペテロ1:14）と書いてある通りです。それにも関わらず、信徒たちのことを思って、なおも教え、導こうとしています。ペテロの心には不安や恐れがなく、最後まで信仰に生きました。わたしたちもし死期が近づいて来たら、そのときどんな言葉を残すでしょうか。